

の葉部における最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。(別紙1-1 7-4)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.04 ppm、0.05 ppm

⑧かぶ

かぶ(根部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を播種時に1回、全面土壌混和处理(10kg/10a)したところ、処理後85~95日、91~101日の根部における最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 8-1)

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.1 ppm、<0.1 ppm

かぶ(葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を播種時に1回、全面土壌混和处理(10kg/10a)したところ、処理後85~95日、91~101日の葉部における最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 8-2)

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.1 ppm、<0.1 ppm

⑨わさびだいこん

わさびだいこん(根部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル10%水和剤の500倍希釈液を計3回散布(400、200L/10a)したところ、散布後14~28日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 9)

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.02 ppm、0.03 ppm

⑩はくさい

はくさい(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル25%水和剤の1000倍希釈液を計2回散布(200、500L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 10-1)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.20 ppm、0.148 ppm

はくさい(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル25%水和剤の1000倍希釈液を計4回散布(200、500L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 10-2)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.071 ppm、0.21 ppm

はくさい(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル25%水和剤の1000倍希釈液を計6回散布(200、500L/10a)したところ、散布後7~21日の最大

残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙1-1 10-3)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.14 ppm、 0.159 ppm

はくさい(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、種子重量の0.5%相当のメタラキシル25%水和剤を種子に粉衣し、メタラキシル8%水和剤の800倍希釈液を計3回散布(200L/10a)したところ、散布後7日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 10-4)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.020 ppm、 0.088 ppm

はくさい(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシルM3.3%フロアブルの500倍希釈液を計3回散布(220、250~300L/10a)したところ、散布後7~14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙1-1 10-5)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.02 ppm、 0.03 ppm

⑪キャベツ

キャベツ(葉球)を用いた作物残留試験(2例)において、種子重量の0.5%相当のメタラキシル25%水和剤を種子に粉衣したところ、処理後83日、115日の最大残留量^{注1)}は以下の通りであった。(別紙1-1 11-1)

メタラキシル及びメタラキシルM： <0.01 ppm、 <0.01 ppm

キャベツ(葉球)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル10%水和剤の1000倍希釈液を計3回散布(200、200~250L/10a)したところ、散布後30日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 11-2)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.02 ppm、 0.06 ppm

⑫こまつな

こまつな(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を播種前に1回、全面土壌混和处理(10kg/10a)したところ、処理後21~35日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 12)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.20 ppm、 0.44 ppm

⑬みずな

みずな(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を播種時に1回、全面土壌混和处理(10kg/10a)したところ、処理後21~31日の最大残

留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 13)

メタラキシル及びメタラキシルM : 1.02 ppm、0.40 ppm

⑭チンゲンサイ

チンゲンサイ(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を生育期に1回、全面土壌混和处理(9kg/10a)したところ、処理後18~32日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 14)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.52 ppm、0.16 ppm

⑮ブロッコリー

ブロッコリー(花蕾)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル10%水和剤の1000倍希釈液を花蕾形成前に計3回散布(300、100~280L/10a)したところ、散布後21~35日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 15)

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.1 ppm、<0.01 ppm

⑯ひろしまな

ひろしまな(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル8%水和剤の600倍希釈液を1回散布(150L/10a)したところ、散布後7~14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 16)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.26 ppm、0.25 ppm

⑰タアサイ

タアサイ(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を1回、全面土壌処理(9kg/10a)したところ、処理後21~35日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 17)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.26 ppm、<0.05 ppm

⑱ たまねぎ

たまねぎ(鱗茎)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル25%水和剤の1000倍希釈液を計5回散布(100、200L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 18-1)

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.01 ppm、0.028 ppm

たまねぎ(鱗茎)を用いた作物残留試験(2例)において、種子重量の0.5%相当のメ

タラキシル 25%水和剤を1回、種子に粉衣して播種したところ、播種後166、245日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 18-2)

メタラキシル及びメタラキシルM： <0.01 ppm、<0.01 ppm

たまねぎ(鱗茎)を用いた作物残留試験(2例)において、種子重量の0.5%相当のメタラキシル 25%水和剤を種子に粉衣して播種し、播種後にメタラキシル 8%水和剤の400倍希釈液を計3回散布したところ、散布後7~14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 18-3)

メタラキシル及びメタラキシルM： <0.01 ppm、<0.01 ppm

たまねぎ(鱗茎)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル 10%水和剤の8倍希釈液を無人ヘリコプターにより計3回散布(1.5~1.8L/10a)したところ、散布後7日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 18-4)

メタラキシル及びメタラキシルM： <0.01 ppm、<0.01 ppm

たまねぎ(鱗茎)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシルM 3.3%フロアブルの500倍希釈液を計3回散布(200、250L/10a)したところ、散布後7~14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 18-5)

メタラキシル及びメタラキシルM： <0.01 ppm、<0.01 ppm

⑱ ねぎ

ねぎ(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシルM 3.3%フロアブルの500倍希釈液を計3回散布(300、200L/10a)したところ、散布後7~14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 19)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.02 ppm、0.03 ppm

⑳ らっきょう

らっきょう(鱗茎)を用いた作物残留試験(1例)において、メタラキシル 10%水和剤の500倍希釈液を計4回散布(150L/10a)したところ、散布後21日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 20-1)

メタラキシル及びメタラキシルM： <0.05 ppm

らっきょう(鱗茎)を用いた作物残留試験(1例)において、メタラキシル 10%水

和剤の500倍希釈液を計3回散布(150L/10a)したところ、散布後186日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 20-2)

メタラキシル及びメタラキシルM: <0.05 ppm

らっきょう(鱗茎)を用いた作物残留試験(1例)において、メタラキシル10%水和剤の750倍希釈液を計3回散布(150L/10a)したところ、散布後186日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 20-3)

メタラキシル及びメタラキシルM: <0.05 ppm

らっきょう(鱗茎)を用いた作物残留試験(1例)において、メタラキシル10%水和剤の500倍希釈液を計4回散布(300g/10a)したところ、散布後14~30日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 20-4)

メタラキシル及びメタラキシルM: 0.17 ppm

らっきょう(鱗茎)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル10%水和剤の500倍希釈液を計3回散布(150、250L/10a)したところ、散布後14~30日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 20-5)

メタラキシル及びメタラキシルM: <0.1ppm、<0.1ppm

②にんじん

にんじん(根部)を用いた作物残留試験(2例)において、種子重量の0.5%相当のメタラキシル25%水和剤を1回、種子に粉衣して播種したところ、播種後107日、120日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 21)

メタラキシル及びメタラキシルM: <0.01 ppm、<0.01 ppm

②パセリ

パセリ(展開葉)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を生育期に計3回、株元散布(10kg/10a)したところ、処理後22~41日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 22-1)

メタラキシル及びメタラキシルM: 0.22 ppm、0.46 ppm

パセリ(展開葉)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を生育期に計3回、株元散布(20kg/10a)したところ、処理後28日、22日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。(別紙1-1 22-2)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.40 ppm、0.56 ppm

②③ みつば

みつば(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル8%水和剤の800倍希釈液を1回散布(150、100L/10a)したところ、散布後14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 23)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.74ppm、<0.05ppm

②④ せり

せり(茎葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を1回、湛水土壌全面散布(6kg/10a)したところ、散布後22~35日、21~35日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。(別紙1-1 24)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.15 ppm、0.34 ppm

②⑤ トマト

トマト(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル25%水和剤の1000倍希釈液を計5回散布(300、500L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 25-1)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.34 ppm、0.31 ppm

トマト(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル25%水和剤の1000倍希釈液を計7回散布(300、500L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 25-2)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.30 ppm、0.30 ppm

トマト(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシルM 4.2%フロアブルの826倍希釈液(1.21g/L)を計4回散布(269、258L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 25-3)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.09 ppm、0.15 ppm

トマト(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、メタラキシルM 5%水和剤の1000倍希釈液を計3回散布(300L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 25-4)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.12 ppm

トマト（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシルM 5%水和剤の1000倍希釈液を計4回散布（300L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 25-5）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.11 ppm

トマト（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシル10%水和剤の1000倍希釈液を計3回散布（300L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 25-6）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.17 ppm

トマト（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシル10%水和剤の1000倍希釈液を計4回散布（300L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 25-7）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.30 ppm

②6 ミニトマト

ミニトマト（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル8%水和剤の400倍希釈液を計3回散布（200、300L/10a）したところ、散布後1～14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 26）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.20 ppm、0.66 ppm

②7 ピーマン

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル25%水和剤の1500倍希釈液を計3回、株元灌注（400mL/株）したところ、散布後1～21日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 27-1）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.86 ppm、0.44 ppm

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル25%水和剤の1500倍希釈液を計5回、株元灌注（400mL/株）したところ、散布後1～14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 27-2）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.40 ppm、0.38 ppm

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 2%粒剤を計3回、株元散布（4g/株）したところ、散布後1～30日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 27-3）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.38 ppm、0.05 ppm

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 2%粒剤を計3回、株元散布（4g/株）したところ、散布後15日、3日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 27-4）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.31 ppm、0.60 ppm

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシルM 1%粒剤を計3回、株元散布（3g/株）したところ、散布後1～7日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 27-5）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.11 ppm、0.10 ppm

㊸ ししとう

ししとう（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 2%粒剤を計3回、株元散布（3g/株）したところ、散布後7日、1日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。（別紙1-1 28）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.08 ppm、0.05 ppm

㊹ なす

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 10%顆粒水和剤の1000倍希釈液を計4回散布（200、220L/10a）したところ、散布後1～14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 29-1）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.20 ppm、0.50 ppm

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシルM 3.3%フロアブルの500倍希釈液を計3回散布（200、130～150L/10a）したところ、散布後1～14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 29-2）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.08 ppm、0.18 ppm

③⑩ きゅうり

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 25%水和剤の 2000 倍希釈液を計 5 回散布（200、500L/10a）したところ、散布後 1～7 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙 1-1 30-1）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.16 ppm、0.39 ppm

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 25%水和剤の 2000 倍希釈液を計 7 回散布（200、500L/10a）したところ、散布後 1～7 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙 1-1 30-2）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.20 ppm、0.50 ppm

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシルM 4.2%水和剤の 826 倍希釈液（1.21g/L）を計 3 回散布（300L/10a）したところ、散布後 1～7 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙 1-1 30-3）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.12 ppm、0.17 ppm

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシルM 3.3%水和剤の 500 倍希釈液を計 3 回散布（220L/10a）したところ、散布後 1～7 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙 1-1 30-4）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.18 ppm

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシルM 5%水和剤の 1000 倍希釈液を計 4 回散布（300L/10a）したところ、散布後 1～7 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙 1-1 30-5）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.10 ppm、0.13 ppm

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 10%水和剤の 1000 倍希釈液を計 4 回散布（300L/10a）したところ、散布後 1～7 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙 1-1 30-6）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.12 ppm、0.24 ppm

③① かぼちゃ

かぼちゃ（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 25%水和剤の 2000 倍希釈液を計 3 回散布（30L/10a）したところ、散布後 14~30 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙 1-1 31-1）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.01 ppm、0.01 ppm

かぼちゃ（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 10%水和剤の 1000 倍希釈液を生育期に 3 回散布（300、293L/10a）したところ、散布後 7~14 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙 1-1 31-2）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.05 ppm、0.03 ppm

③② すいか

すいか（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 8%水和剤の 800 倍希釈液を計 3 回散布（250、300L/10a）したところ、散布後 7 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙 1-1 32）

メタラキシル及びメタラキシルM： <0.01 ppm、0.02 ppm

③③ メロン

メロン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 25%水和剤の 2000 倍希釈液を計 3 回散布（200L/10a）したところ、散布後 3 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙 1-1 33-1）

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.23 ppm、0.04 ppm

メロン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシルM 3.3%水和剤の 500 倍希釈液を計 3 回散布（200、250L/10a）したところ、散布後 7~14 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙 1-1 33-2）

メタラキシル及びメタラキシルM： <0.01 ppm、<0.01 ppm

③④ ほうれんそう

ほうれんそう（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、種子重量の 0.5% 相当のメタラキシル 25%水和剤を種子に粉衣して播種したところ、播種後 31~47 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙 1-1 34-1）

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.01 ppm、<0.01 ppm

ほうれんそう（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル2%粒剤を播種時に1回全面土壌処理（9kg/10a）したところ、処理後59～69日、113～123日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。（別紙1-1 34-2）

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.1 ppm、0.32 ppm

③5 オクラ

オクラ（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル2%粒剤を計3回、土壌表面散布（10kg/10a）したところ、散布後1～14日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 35）

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.10 ppm、0.34 ppm

③6 しょうが

しょうが（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル2%粒剤を計3回、土壌表面散布（20kg/10a）したところ、散布後30～60日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 36）

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.30 ppm、0.31 ppm

③7 葉しょうが

葉しょうが（茎部・塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル2%粒剤を計3回、土壌表面散布（20kg/10a）したところ、散布後21～45日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 37）

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.23 ppm、0.19 ppm

③8 たらのき

たらのき（芽部）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシル2%粒剤を1回、土壌表面散布（20kg/10a）したところ、散布後217日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 38-1）

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.01 ppm

たらのき（芽部）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシル2%粒剤を計2回、土壌表面散布（20kg/10a）したところ、散布後186日、229日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。（別紙1-1 38-2）

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.01 ppm、0.015 ppm

たらのき（芽部）を用いた作物残留試験（3例）において、メタラキシル2%粒剤を計2回、土壌表面散布（10kg/10a）したところ、散布後229日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 38-3）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.01 ppm

たらのき（芽部）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシル2%粒剤を計2回、土壌表面散布（30kg/10a）したところ、散布後229日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 38-4）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.046 ppm

③9 うど

うど（茎葉部）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシル8%水和剤の800倍希釈液を1回、根株瞬間浸漬後、伏込栽培した。浸漬処理後25日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 39-1）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.26 ppm

うど（茎葉部）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシル8%水和剤の800倍希釈液を1回、根株瞬間浸漬後、伏込栽培した。浸漬処理後25日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 39-2）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.26 ppm

うど（茎葉部）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシル8%水和剤の400倍希釈液を1回、根株瞬間浸漬後、伏込栽培した。浸漬処理後25日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 39-3）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.48 ppm

うど（茎葉部）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシル8%水和剤の800倍希釈液を1回、根株瞬間浸漬後、伏込栽培した。浸漬処理後30日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 39-4）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.02 ppm

うど（茎葉部）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル8%水和剤の800倍希釈液を1回、根株瞬間浸漬後、伏込栽培した。浸漬処理後25～45日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 39-5）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.2 ppm、<0.1 ppm

④⑩くわい

くわい（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル2%粒剤を計2回、湛水散布（6kg/10a）したところ、散布後21日、30日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。（別紙1-1 40）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.05 ppm、0.12 ppm

④⑪温州みかん

温州みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル8%水和剤の600倍希釈液を計2回散布（400、500L/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 41-1）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.04 ppm、0.02 ppm

温州みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル8%水和剤の600倍希釈液を計2回散布（400、500L/10a）したところ、散布後14～28日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 41-2）

メタラキシル及びメタラキシルM：1.26 ppm、1.66 ppm

④⑫いちご

いちご（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、メタラキシル2%粒剤を定植前に1回、畝面土壌混和处理（10kg/10a）したところ、処理後118日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 42-1）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.03 ppm

いちご（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル2%粒剤を定植前に1回、畝面土壌混和处理し、メタラキシル2%粒剤を1回マルチ前土壌表面処理（10kg/10a）したところ、処理後63、89日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 42-2）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.13 ppm、0.25 ppm

いちご（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル10%水和剤の1000倍希釈液を計3回散布（1000、300L/10a）し、メタラキシル2%粒剤を土壌混和（10kg/10a）したところ、処理後77～109日、86～116日の最大残留量^{注1)}は以下のと

おりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙1-1 42-3)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.026 ppm、0.146 ppm

④3ぶどう

小粒種ぶどう(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル25%水和剤の1250倍希釈液を計1回散布(30L/10a)したところ、散布後44~80日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙1-1 43-1)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.11 ppm、0.14 ppm

大粒種ぶどう(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、メタラキシル25%水和剤の1250倍希釈液を計1回散布(30L/10a)したところ、散布後49~83日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙1-1 43-2)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.16 ppm

小粒種ぶどう(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル25%水和剤の1250倍希釈液を計2回散布(30L/10a)したところ、散布後44~80日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙1-1 43-3)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.37 ppm、0.08 ppm

大粒種ぶどう(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、メタラキシル25%水和剤の1250倍希釈液を計2回散布(30L/10a)したところ、散布後49~83日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙1-1 43-4)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.40 ppm

小粒種ぶどう(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、メタラキシル25%水和剤の2500倍希釈液を計2回散布(30L/10a)したところ、散布後45~80日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙1-1 43-5)

メタラキシル及びメタラキシルM： 0.15 ppm

大粒種ぶどう(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、メタラキシル25%

水和剤の2500倍希釈液を計2回散布(300L/10a)したところ、散布後49日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 43-6)

メタラキシル及びメタラキシルM: 0.14 ppm

④④ パッションフルーツ

パッションフルーツ(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル10%水和剤の1000倍希釈液を計3回全面散布(300L/10a)したところ、散布後30~45日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。(別紙1-1 44)

メタラキシル及びメタラキシルM: <0.05 ppm、<0.05 ppm

④⑤ ホップ

ホップ(乾花)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を1回、株元処理(20g/株)したところ、処理後122、113日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。(別紙1-1 45-1)

メタラキシル及びメタラキシルM: 1.0 ppm、0.6 ppm

ホップ(乾花)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を1回、株元処理(20g/株)し、メタラキシル15%水和剤の500倍希釈液を計4回散布(300~600L/10a)したところ、散布後17、12日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 45-2)

メタラキシル及びメタラキシルM: 5.8 ppm、20.0 ppm

ホップ(乾花)を用いた作物残留試験(2例)において、メタラキシル2%粒剤を1回、株元処理(20g/株)し、メタラキシル15%水和剤の500倍希釈液を計3回散布(150~200、350~700L/10a)したところ、散布後14~44日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 45-3)

メタラキシル及びメタラキシルM: 5.45 ppm、8.63 ppm

④⑥ みょうが (代替)

みょうが(花蕾)を用いた作物残留試験(1例)において、メタラキシル2%粒剤を計2回、土壌表面散布(30kg/10a)したところ、散布後30~37日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}(別紙1-1 46-1)

メタラキシル及びメタラキシルM: 1.02 ppm